ロシア極東で最大の規模を誇るボストチヌイ港のコンテナターミナル。

PORTS & HARBOURS IN THE WORLD

ボストチヌイ港

（ロシア連邦）

日本海に連なるウランゲル湾の沿岸に位置するボストチヌイ港。行政地域区分上はナホトカ市に入るこの港は、ロシア極東では最大の規模を誇り、ロシア極東とアジアを結ぶ物流拠点として、日本との関係も深まりつつある。

■ロシア最大級のコンテナターミナル

ボストチヌイ港の業務開始は、1976年5月。1992年に同港は株式会社となった。それ以来この港は、ロシア極東とアジアを結ぶ物流拠点として活躍してきた。

ボストチヌイ港の年間貨物取扱能力は、2,000万トンを超える。港内のバースは17を数え、その総延長は3.5km、水深は6.5m～16mである。同港のコンテナターミナルはロシアで最大級であり、石炭ターミナルも設置されている。さらに鉱物性肥料などの化学製品や木材の積み替えを行う施設もある。

ボストチヌイ港では、15万載貨重量トンまでの大型船舶の荷役が可能だ。また、港とシベリア横断幹線鉄道を結ぶ鉄道が港内にあるほか、ナホトカ市へ続く自動車道路もある。

ロシア極東石炭輸送の最大手ボストチヌイ港社が運営する石炭ターミナル。

■発展著しい石炭輸送とコンテナ輸送業務

ボストチヌイ港社は港を基礎として設立された株式会社。ロシア極東では最大手の物流会社である。石炭の積み替えを専門とし、コンベヤ設備を使って船積業務を行っている。

現在、ボストチヌイ港社は石炭取扱施設の大規模な更新を計画している。その目的で米国のHeyl&Patterson社

コンテナターミナルで船に積荷された貨物は、日本を含むアジア諸国へ海上輸送される。

と、石炭輸送の最新機器の製造及び納入に関する契約を結んだ。

「設備の近代化は不可欠です。現在隣接するワニノ港やポシェット港が急速に発展しています。これから伸びていく貨物輸送の需要に対応するには、港の能力はもう限界に来ているのです」とボストチヌイ港社のセルゲイ・クシュナリョフ社長は力説する。

一方ボストチヌイ港のコンテナ・ターミナルは、1976年の稼動開始当時、年間７万TEU程度の貨物取り扱いが精一杯であった。現在、同港でコンテナターミナルを扱うVSK社の設備は、年間65万TEUのコンテナ積み替えに対応できる。　またVSK社は、今後総額２億5,000万ドルをつぎ込んで継続的に設備の更新を行っていく計画を持っている。ターミナルの取扱能力は最終的に年間250万TEUにまで上がる予定だ。同社のジョン・スクルチス社長によると、2007年の貨物取扱量はこれまでで最大となった。

■アジア諸国との物流拠点として

VSK社の2007年度の貨物取扱量のうち、輸入貨物の70%は韓国から、28%は中国からの貨物である。日本からの輸入貨物は、いまのところ全体の２%を占めるにすぎない。しかし、現在申請が行われている港湾型経済特区の設立が実現し、シベリア横断鉄道によるコンテナ輸送システムが整備されたら、ボストチヌイ港は日本からの物流の主要中継点となるだろう。

港湾管制室の内部。

ウランゲル沿岸に面したボストチヌイ港の眺め。ウランゲル湾は日本海とつながっている。

「日本からのコンテナ貨物の内容は、主に自動車の構成部品と家庭用機器です」とVSK社広報担当のナデージュダ・バラノワ氏は言う。

VSK社が取り扱う輸出貨物でも、発送先で首位を占めるのはやはり韓国。コンテナの66%は韓国へ、31%は中国へ向けたものだ。そして、日本向けは、全体の３%にとどまる。日本へ向けてロシアから送られる貨物は、木材や農業用肥料などだ。

いずれにしても同港は、近い将来、日露の海上物流を支える国際貿易拠点港として、さらなる発展が期待できるだろう。

（取材・文／O.ジュヌソフ　写真／D.パブレフスキー）